

山崎裕司, 山本淳一(編)

リハビリテーション効果を最大限に引き出すコツ—応用行動分析で運動療法とADL 訓練は変わる—

網本 和

首都大学東京健康福祉学部理学療法学科

理学療法士あるいは作業療法士は、患者の状態を評価し、最適(と思われる)治療プログラムを作成し、これを提案して進めていく。ところが臨床ではしばしば、患者からの「これはとても無理です、できません」などの反応に遭遇し、困ったわれわれはこうつぶやく。「困った患者だな」と。治療プログラムがうまく進まないのは、患者の態度が悪いからであり、やる気がないからであり、病気が重いからであり、セラピストの教え方が下手で、プログラムそのものに欠陥がある、とは考えない。治療者—患者関係という医療情報に関する圧倒的不公平な状況では、これが普通である。もし読者が「困った原因はセラピストにある」という認識を持つ方なら、本書の内容の核心部分は理解したも同然であり、その場合立ち読みでもかまわない。しかし「困った患者(困っている患者ではなく)だな」と思ったことが一度でもあるセラピストであれば、本書を熟読することで明日からその「行動」が変化するに違いない。

本書は「応用行動分析」という比較的耳に新しい方法を、理学療法・作業療法の臨床現場に即応し、その課題と具体的な対処法を明示している。まず先行刺激(A)、行動(B)、後続刺激(C)、強化、消去、シェイピ

ングなど、応用行動分析に必要な基本的な用語がわかりやすく解説され、その上で具体的な症例が呈示される。本書には慧眼すべき記述がたくさんあるが、その中でも次の一文はしびれる。すなわち「ADLに関する教科書には片麻痺患者がどのような移動形態をとるべきか・・・は記されている。しかしその動作が出来ない場合どのように練習すればよいかはほとんど記載されていない。(本書 5 ページ)」のである！ 目から鱗が落ちる、とはこのことをいう。その意味で、「リハビリテーション効果を最大限に引き出すコツ」という書名は誇張ではない。とりわけ本書第三章の「うまくいかない場合の原因分析」には様々な問題に対する考え方が示されており、いよいよ「コツ」に近づいているという実感を得ることができるだろう。人の行動を変化させるためには何が重要なポイントなのか？ 紙幅の都合で全部は紹介できないが、「目標を明確にする」ことが大事であるとの指摘は興味深い。筋力がどのくらいアップすれば歩けるようになるか、を示すことの重要性は当然理解されているだろうが、実際にどの程度明確に示しているか読者は自問するだろう。

患者の機能が改善し、ADL の自立度が向上することに喜びを感じないセラピストはいない。ゴールは決まっているのである。あとはどのように行動を変容し、ゴールに近づいていくか、である。本書は、その道筋を平易で巧みな構成によって誘導してくれる、またとないガイドであることを確信している。☆☆☆です！

●B5 判 224 頁

定価 3,570 円(本体 3,400 円+税 5%)

2008 年 三輪書店・刊